K-ON <Backroom Story>

グラッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｋ－ＯＮ　＞Ｂａｃｋｒｏｏｍ　Ｓｔｏｒｙ＜

【Ｎコード】
Ｎ７６０９Ｚ

【作者名】
グラッド

【あらすじ】
少子高齢化とか何とかのせいで今年から共学になった桜が丘高等学校に入学した邑園結祐（むらそのゆうすけ）。
彼にはちょっとした問題があり・・・・。
そんな結祐が軽音部のメンバーや、先輩、友達と紡いでいくお話です。

不定期更新、若干キャラ崩壊してるかも、漢字間違いたまにある

かもですが興味が少しでも湧いたら読んでみてください＞m（__）m＜

第一話　？PROLOGUE？（前書き）

初投稿です。

感想をいただけるとうれしいです。

第一話　？PROLOGUE？

いつからだろう？
こんな体質になったのは。
これのせいで俺は中学時代毎日が修羅場だった。
治そうとも試みたけどうまく治りきらなかった。
だから、俺はもう決めたんだ。

そう、俺はもう女子なんぞには関わらない！！！

♪♪♪♪♪

桜が咲き誇り、誰もが様々な思いを掲げて新しくスタートを切る4月。
『彼女を作る』『部活に打ち込む』『受験』『まぁ、頑張る』などなど、様々な目標をもち心地よい風に吹かれている新入生の中、今日から晴れて桜が丘高校に入学した俺、邑園（むらその）　結祐（ゆうすけ）はクラスの面々を見て絶望していた。

「な、何でこんなに女子率が高いんだ？」

思わず口に出してしまった。
だがまあ仕方がないはずだ。
だって、クラス35人中30人が女子なんだし。
ただここで俺が普通の男子と違うのは、喜ぶべきこの状況に絶望しているところだ。
では、なぜ絶望しているかと言うと、俺はメチャクチャ女子が苦手なのだ。
どの位かと言うと、目が合うだけで脳内がフリーズして頭から煙

を出しちゃうくらいニガテだ。
つーわけで、ガッツリＢｌｕｅになっていると、クラス内で数少ない希少種であるはずの男子から、
「何でって、ここ去年まで女子校だったからじゃない？」
と、まさかの返答が返ってきた。
若干驚いたけど、その声は非常に聞き慣れた声であり、そして同時に俺をこの状況にしやがったヤツだと確信したので、俺はにこやかスマイル＋額に青筋でその声の主を見（睨んだ）た。

「テメェ知ってて俺をここにいれたのか・・・・勇利」
「まぁね～。だって、女子率９０％以上だよ？行くっきゃ無いっしょ？」
「よく堂々と不純な入学動機叫べんな・・・って、勇利のそんなことは今に始まったことじゃねぇからどうでもいいんだ？勇利、お前俺がメチャクチャ女子苦手なのも、高校ではあまり女子と関わりたくないって願望も知ってんだろ？」
「だからここに誘ったんじゃん！ここなら結祐の女子がニガテなのも半強制的に治るじゃんｗｗ」
「志望校をお前に相談したのが間違いだった。そして笑うな」
「まぁまぁ、でも考えてみなよ、３年間女子と戯れ放題だよ？バレンタインなんか学年女子全員から告られたりしてさ、『ごめん皆、僕はみんなに対等に愛を与えることが使命なんだ。だから誰か一人なんて選べないよ』とか言っちゃったりしてさ、そしたらさ、・・・グフ・・くふふふふふ・・・・・」
この妄想族がと呟きながら勇利の顔をみたが、その顔は気味悪く歪み、すでに俺の悪友篠原勇利（しのはらゆうり）の顔ではなく不純な考えを膨らませ

た変人、いや、もはや不純物だ。

こいつ絶対彼女できねぇだろーな。

・・・・俺もだった。

なんせ声かけらただけでもショートしちま・・・・

「あの～・・・・」

ボンッ？（ショート音）

「えぇ？だ、大丈夫ですか？」

「あー、こりゃもうダメだ」

「ダメなんですか？」

「あ、え～と、こっちの話だよ。それよりも、確か君は平沢憂ちゃんだっけ？」

「あ、そうです！私平沢（ひらさわ）憂（うい）です・・って、まだ自己紹介もしてないのになんで名前知ってるんですか？」

「当たり前だよ！これから一緒に過ごす仲間（の可愛い女の子）の名前と顔くらい名簿と出席番号で確認しておくさ。あと、遠慮して敬語なんてつかわなくていいよ」

「そっか。でも偉いんだね。きちんと最初に名前を確認しとくなんて」

「いやいや、そんなの（僕の輝かしい未来のために）あたりまえだよ！！」

「ふ、不純な動機が見え隠れしてんのは気のせいか・・・・？」

「おお！結祐！いつの間に復活した！？」

情けないが今です・・・・なんて恥ずかしくて言えねー。

っつか、どうにかならんかな？この体質っつーか性格。

話しかけられてショートは情け・・・・

「よかった～！さっきはゴメンね！！」

・・・・あ、謝らなくていいから、話しかけない――――ボンッ！！

「えぇ！？また！？」

「頑張ったな結祐。３秒耐えたぞ」

「ご、ゴメン。私さっきからなにが・・・・」

「あぁ、憂ちゃん気にしなくていいよ。これはこいつの体質みたいなもんだから。・・・・とっ、とにかく、俺は篠原勇利。んでコイツは邑園結祐。僕たちは中学生の時からの友達なんだけど、実は結祐は極度の女恐怖症っつーか、超恥ずかしがり屋？それとも体質なのか？ま、まぁとにかく女子に話しかけられたり、目が合っちゃったりするとこんな感じに頭から煙を吹いてショートしちゃうんだ」

「そ、そうなんだ・・。じゃあ、何でこの高校にしたの？ここ去年まで女子高だったんだよ？」

「それはまぁ、僕が誘ったんだけどさ。女子が多い環境にいれば治るかな～的な感じで。・・・・・・でさっ！！」

「な、なに？」

「憂ちゃんさ、コイツのこの性格みたいなの治すのに協力してくれないかな？僕ここにいるけど実はこのクラスじゃないからさぁ～。お願いっ！！」

「（えぇ！？クラス違うんだ！）う、うん。いいよ。席も隣だし」

「それじゃあ、憂ちゃん！後は頼んだ！！」

「え、ちょ、ちょっと・・・・」

そうだ勇利！ちょっと、ちょっと待てぇ！！

と、言いたいのにショートしてて身体が動かない！！

くそぉ、勇利め、何で男子じゃなくて女子に頼むんだ！？

「あの――――――」

「だぁ！！それ以上なんも言わないで！！と、とにかく勇利が変なこと言ってゴメン！それと、改めて俺は邑園結祐。よろしくな平沢」

「憂でいいよ。こちらこそよろしくね結祐くん」

「下の名前で呼ばれた・・・・・」

「ん？何か言った？」

「なにも言って――――――――ボンッ！！」

「えぇ！？ご、ゴメン結祐くん。私今度はなにがまずかったの！？」

こうして、女子が得意じゃない俺の、元女子高での『甘くなくて、ほろ苦い』・・・要は苦いだけの青春がスタートしてしまった。

第二話　？部活見学！！？？（前書き）

戸惑いながら書いてます。

至らない点あったらお知らせください。

また、感想をいただけるとそれを励みにして頑張ります！！

第二話　？部活見学！！？？

俺、邑園結祐（１５歳）は女子がニガテという非常に残念な男子（ｂｙ篠原勇利）らしい。

しっかぁ～し！
俺は進化した！！

「結祐くん部活決めた？」
「まだだけど、憂は？」
「私もまだなんだ。だから、今日の放課後部活見学に行かない？」
「見学かぁ、俺も部活はやろうかなぁと思ってたから一応大体の部活は行ったんだけど・・・。先輩が全員女子だから部員が多すぎる部活は厳しいし。運動部じゃ試合に出れないしさ・・・」
「そっかぁ・・・。あ！じゃあさ、お姉ちゃんのいる軽音部に行かない？」
「軽音部って着ぐるみでチラシ配ってたやつ？つか姉がいるんだ」
「うん。ニワトリとかの着ぐるみで頑張ってた部だよ。あ、でも心配ないよ。お姉ちゃんはふわふわぽかぽかしててすごく可愛いからきっとおもしろいよ！」
「軽音部じゃなくて憂の姉ちゃんが？」
「うんっ！！・・・・も、もちろん軽音部のほかの先輩もいい人だし、おもしろいよ！」
「ふ～ん。じゃあ行ってみるか」
「うん！じゃあ私、他の友達も誘ってくるね」
「おぉ、りょ～かい」

そう言って俺は歩いて行く憂を見届けた。

この会話と見送り、合わせて約5分。
入学して1週間。
憂のおかげで、俺は眼さえ合わなければ5分は喋れるようになった。

ただし、喋り終わると――――――ボフン！！

「・・・・せんせー。邑園くんが頭からけむり出してまーす」

しょ、ショートします。

?.?.?.?.?

と、いう訳で放課後。
俺は憂とその友達の鈴木（すずき）　純（じゅん）と一緒に軽音部が活動している音楽室へ向かっていた。

・・・・一緒というには少し離れて歩いているけど。
だって・・・

「結祐はなんでそんなに離れて歩いてんの～？憂で耐性ついたんじゃないの？」
「それは憂限定なんだよ！そして下の名前で呼ぶな！俺を見るな！！」
「え～、いいじゃん結祐～。私のことも純でいいからさぁｗｗｗ」

そういいながら近づいてくる純。
後ろで憂が「じゅ、純ちゃんそのへんにしておかないと・・・・」といってるがお構いなしだ。

俺だってそれを黙って見ているわけじゃない。
即座に後ずさりを開始！！
したかったが、既に『会話をする』『下の名前で呼ばれる』『目があってしまった』の３つの攻撃により、ＨＰが残り少ない俺はけむりさえ出ていないものの、身体の主導権がもう無かった。
ど、どうすれば・・・！？と、そうこうしているうちに、ついに純が俺の目の前に立った。
それだけならなんとか耐えられるものの、目を逸らして下を向く俺を覗き込んできたんだからもうアウトだ。
くっ！耐えるんだ邑園結祐。
お前は進化しただろ！
耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ・・・・・・・・・。
そう呪文のように脳内で反復している俺などお構いなしだと言わんばかりに純は再度俺の目をジッと見つめた。
が、脳内反復していて反応のない俺に飽きたのか
「なんだぁ～。大丈夫じゃん。つまんないな～」
と、ついに覗き込むのをやめた。
丁度その瞬間。
俺の身体に異変が起きた。
一方、俺の反応の薄さに飽きた純は大きなあくびをしつつ憂を見たのだが、

「じゅ、純ちゃん・・・・・！！」
「え？どうしたの憂？」

その憂の青ざめた顔と、指差す手の震えに異変を感じ急いで再度振り返った。

また、純が再度振り返るまでの短い間に、ショートするのを我慢した俺は（恥ずかしさやらなんやらの）消化不良が起きて、

・・・・・ぽたっ。

「『ぽたっ』？何の音？」

「・・・・・ぐっはぁっっ！！」

口から血を盛大に吐き出した。

「吐血ぅ！？あ、『ぽたっ』って血のたれた音か～」
「純ちゃん納得してる場合じゃ・・・・」
「へぇ～、やっぱり結祐はおもしろいね。まさか、ショートで済まないくらいの攻撃加えると吐血するなんてｗｗ」
「あ、悪魔だ。純は癖毛の悪魔だ・・・・うっ！」
「ちゃっかり名前で読んでんじゃん」
「お前が呼べって言ったんだ・・・・ぐふっ！」
「意外と純粋か！？っていうかあんま無理しないほうがいいよ」
「それ純ちゃんが言えることじゃないと思うよ・・。結祐くん、保健室行く？」
「だ、大丈夫。それより音楽室行こうよ」
「そうだね。そうだ、結祐歩くの手伝ってあげるよ～ｗｗ」

ぱしっ（純が俺の手をつかんだ音）

「・・・・・・」
「あれ？反応なし？」
「純ちゃんそろそろやめてあげようよ・・・・」
「いや、これでやめるつもりだったんだけど・・・・。ついに覚醒したの――――――」
「あが・・・・」
「「『あが』？」」

「あががが・・・・・・・・・・・・・・ガクッ」

「・・・・どうしよう憂？」
「と、とりあえず離れて見てれば・・・・」
「はっ！！」
「「結祐（くん）！！」」
「お、お花畑と手招きしている少年が見えた！」
「ごめん。あたしが悪かった」

謝るなら最初からやめてくれ。
もう手遅れなんだよ・・・・グスッ。

「本当に大丈夫？結祐くん」
「ああ。ただ、こっから音楽室まで少し離れて歩いてくれたりすると助かる」
「合点了解です！！」
「純は視界から消えるくらい遠くを歩いてくれると俺は喜ぶぞ」
「う・・・それはひどい」
「嘘だよ。ほら行こうぜ。憂、純」
「うん。そうだね。行こうか純ちゃん」
「うん！軽音部ってカッコヨさそうだな～」

・・・・俺への罪悪感はもう消えたんかい。
と、うんざりしつつ俺は憂と純が歩き若干距離が開くと再び歩き出した。

・・・・・・ほんとにこんなんでこの学校で3年間生きていけるのかな、俺・・・。

？？？？？

ついに音楽室についてしまった。
ま、正確には音楽準備室だけど、軽音部の活動拠点なのには変わりないな。

正直なトコロ、俺はここ数日の部活見学でいい事は1つも無かった。
というか、割と最初の段階で精神が冥界にトリップしてしまったので記憶がない。
なので部活の雰囲気なんかは俺を散々振り回してくれた勇利に聞いたんだけど、『結祐ってば終始ニコニコして一言もしゃべらないもんだからよっぽど感動したんだねｗｗｗ』となぜか見学内容では

なくこんなふざけたこと言いやがった。
その時は『っつか、そもそも質問の答えになってねえよ』とツッコミを入れることすら忘れてたなぁ・・・。

もちろんそのあと勇利(バカ)はキチンと成敗したけど、結局話しは聞けずじまい。
覚えているのは意識が戻るたびに再び冥界に引き込まれるという無限ループのみだけで・・・・・思い出したら気持ち悪く・・・・・うえぇ。

ということでぶっちゃけ軽音部に行くのも嫌だし、部活に入るつもりも全くない！！
でもまあ憂の好意を無駄にするわけにはいかない！ここまで来たけども、

「結祐くんドア開けるけど大丈夫？」
「だ、だだだだ大丈夫」
「結祐。深呼吸、深呼吸」
「すーはー。すーはー・・・」
「それじゃあ開けるね」

憂はそう言って扉を押す手に力を入れる。

親父、お袋、結祐はこの軽音部から必ず生還して見せます！！

「「「失礼しまーす」」」
「あ、憂！」
「憂ちゃんじゃん」
「いらっしゃ～い」

中には3人の先輩がいた。
一人は憂に瓜二つだが髪の毛を肩のあたりで切りそろえているところとそのいかにも天然っぽいオーラだけは憂とは違った。
しかし髪の色といい、顔立ちといい、異常なほど似ているなぁ。
恐らくこの人が憂のお姉さんなんだろう。

もう一人はソファーで寝っ転がっていた。
特徴を述べるならば、おでこ。
カチューシャで前髪をあげているからおでこが見えるのは当たり前なのだか、なんだかそれ以上に何かを訴えかけてくるおでこだった。
あとは、なんかはきはきしていそうなオーラがにじみ出ている気がした。
それにしても、ソファーで寝っ転がってる先輩からはきはきしてそうなオーラが出るとは。

もう一人はティーカップを持っているおとなしそうな先輩だった。
ただ、特徴は山ほどあった。
まずは綺麗な金髪の髪。
天然パなのかパーマかけてるのかは不明だけど、フワフワした長い髪はどこかの王族を思わせるようだった。
次に雰囲気。
とても一つ上の先輩とは思えない寛大な雰囲気というか、とにかく大人の女性を思わせるような雰囲気だった。
そして極め付けには・・・・・・まゆげ。
俺自身極め付けにまゆげを持ってくることに違和感ＭＡＸだけど、このたくあんのような太く整ったまゆげを無視できるものはいないだろう。

幸い3人とも憂のほうを見ていたので先輩たちをちゃんと見るこ

とができたが・・・・・・・・・・親父、お袋、俺は短い人生だったが悔いは無いよ。もしもこの軽音部から生還できなくとも・・？

と冗談はほどほどにしておいて。

さて、先ほどリポートしたとおり、中にいた先輩方は全員可愛かった。

うん。それは認めよう。

でも何故にメイド服！？

「お姉ちゃん、部活見学なんだけど・・」

「うん入って入って～」

俺の心のモヤモヤを無視って奥の机へと通す平沢姉。

・・・・心の声を無視るって当たり前か。

そう自分で自分にツッコんだ瞬間。

「逃がさないわよぉ～！！！」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

という声とともに何かが通り過ぎた。

人・・・・だよな？

「あはは。さわちゃんあのクリスマス会以来、自作の服着せるのが趣味になっちゃって」

「そ、そうなんだ～」

憂、顔が引きつってるぞ。

っつか、ココ軽音部で合ってますよね？心配になってきたよ俺。

そんな俺の気持ちとは裏腹に笑顔で席に俺たちを着かせる平沢姉。
ちなみに俺のＨＰはここまで奇跡的にノーダメージだ。

「ムギちゃん。これを運べばいいんだよね」
「そうよ。熱いから気をつけてね」

どうやらお茶をくれるらしい。
本当にここ軽音部・・？

そう思いため息を軽くつきつつ平沢姉をちらっと見ると。

カタカタカタカタカタカタ・・・・・・

ティーカップが踊っていた。
とんだ不器用さんだな平沢姉。

と、その時

「あ！」

ついに平沢姉の手からティーカップが飛び立った。

「まじかよ！！」

そう言いながら俺はなんとかカップを受け止めた。
幸いいい感じに垂直に落ちてきたので中がこぼれることもなかった。

「せ、セーフ」

「おぉ！ありがとね～」

そういいつつ軽くお辞儀をする平沢姉。

まったく、気をつけてくださいよ！そう言ってやろうと思ったその瞬間、

「お姉ちゃんお盆斜めにしちゃダメ？」

「え？」

その気の抜けた返事の直後、ガシャン？という音と共に俺の頭の上にティーカップが逆立ちした。

まあ、要は頭の上に盛大に紅茶がこぼれた。

しかもいれたてのアツアツのやつが。

「あっちぃぃぃぃぃっ？」

と言った時には既に俺は水道に向かっていた。

幸い、水道は音楽準備室内にあったので即座に消火活動を開始？？

しゅうううううう・・・・・・

俺の脳内データベースに問い合わせてみたが、どうやらショート以外で頭からけむりを出すのは始めてらしい。

この場合は頭は頭でも頭皮からだけどな。

と自分で自分に勝手に訂正をいれたその時、すっとタオルを渡された。

顔を見ていないから確証は無いけど多分平沢姉だろう。

とりあえず頭も冷やされたのでタオルを受け取り頭を適当に拭った。

・・・・・なんだろう？この気まずい感じ。
もしかして、みんな俺の顔色窺ってる・・・？
とにかく何か言わなくては！！

「え、え～と・・・。だ、大丈夫！俺、頭からけむり出すの慣れてますから！！」

しーん・・・・・。

し、しらけた！！
一体どうすりゃあいいんだ！？
一応場を和ませるための渾身のギャグだぞ！！
頼む！誰か笑ってくれ！！

「・・・・大丈夫？」
「はい。大丈夫です・・・・・グスッ」

一度もショートしたわけじゃないのに、俺の心はズタズタになった。

第二話　?部活見学!!??（後書き）

次回は・・・・・

『じゃあ、改めて部員紹介といくかぁー!!』

『え・・・・。そ、それはちょっと・・』

『そう言われるとなおさらやりたくなるのが人の性ですよ～』

『先輩まさか・・・男!?』

次回、【部活見学?】

乞うご期待!!・・・・・とい言って、期待してくれるとうれしいです!!

第三話　？部活見学！！？？（前書き）

第３話。

どうぞ！！

第三話　?部活見学!!??

「じゃあ、改めて部員紹介といくかぁー!!」

おでこが印象的な先輩のその一言でやっと本格的に部活見学になった。

できればもうちょっと早くそうして欲しかったけど。

頭と心がひりひりする・・・。

「それじゃあ、まずは――――――」

「はいっ!!りっちゃん隊長!」

「む、何だね?唯隊員!」

「まずは、1年生に自己紹介して欲しいです!!」

「それは確かに、それじゃあ名前を教えてくれ!!」

そう言っておでこの印象的な先輩（以下おでこ先輩）が純を指差した。

あまりのハイテンションに純は若干たじろいでいた。

俺が最初だったら絶対答える前にショートだな。

「えっと、鈴木純です」

「鈴木さんな。それじゃあ次!隣の男子!!・・・・・って男!?」

「今年から共学になったんでいても不思議ではないと思いますけど」

「なにぃ!!今年から共学だったのか!?」

「私も知りませんでした。りっちゃん隊長!!」

「わたしもです。りっちゃん隊長」

おでこ先輩に平沢姉＆ａｍｐ；金髪の先輩が乗ってきた？
自然にこれが成り立つとは・・・軽音部、恐るべきギャグ線。

一応この辺で補足しておくが、俺は未だに目線を適当なとこに逸らしているからなんとかノーダメージだ。

「ところで、共学っていう驚愕の事実も判明したところで、自己紹介続けていいですか？」
「ああ、いいけど。今のって狙ったのか？」
「狙う？何をっすか？」
「むむ、自然にダジャレが出るとは恐るべき新入生！！」
「・・・始めていいですか？」
「ああ。悪い悪い。いいよ」
「え～、邑園結祐です」
「邑園君な。それにしても、何でさっきから目を合わせないようにしてるんだ？」

ギクッ？
ば、バレてた？

くっ、このままでは危険だ。

その一心で俺は憂に助けを求めるべくアイコンタクトを図ろうとした。
のだが、そこで気がついてしまった。

アイコンタクトなんてしたら、俺ショートじゃね？

完全に退路は途絶えてしまった。

・・・・ええい？ままよ？
もうなるようになれだ？

「べ、別に逸らしてなんかないっすよ」
「ふーん。じゃあ私の目をしっかり見てみてよ」
「え・・・・。そ、それはちょっと・・・・」

なるようにできねぇぇぇ？
やっぱショートは辛ぇよ？

と、俺の心が涙でいっぱいになりかけたその時だった。

「あ、あの？」

憂ぃぃぃっ？
ナイスタイミング？
やっぱ持つべきものは最高の友達だね。

「結祐くんは目が合ったり触れられたりすると、なんて言うかおもしろいことになっちゃうからあんまりやめた方が・・・・」
「「「おもしろいこと？」」」

憂、俺が送った褒め言葉を返せっ？

余計食いついちゃったじゃんか？

「ふ～ん。おもしろいことか～」
「ちょ、のぞきこまないで！ホントにやばいですから！！」
「そう言われるとなおさらやりたくなるのが人の性ですよ～」

そう言って俺を覗き込んだおでこ先輩。
必然的に目があってしまう。
嫌だ！ショートは、冥界旅行は嫌だァァァァ！！
と、思ったのだが、
「アレ？目があってんのに・・・？」
「なんだ大丈夫じゃん。憂ちゃんも大げさだなぁ」
俺はショートしなかった。
何で？どうして？Ｗｈｙ！？
全く意味不明だった。
何でショートしねぇんだ！？
考えられるとすれば・・・・・
「先輩まさか・・・男！？」
「んなわけあるかぁッ！！」
「ですよね～。じゃあどうして・・・・」
「結祐くん、もしかして治ったんじゃない？」
「治ったのかな・・？」
そう俺が首をかしげると、おでこ先輩が急に俺の顔をガッチリつかんだ。
一瞬この場にいる１年生が全員ヤバいと思ったがまたもや平気だった。
何でだ？

謎が深まってしまったので再び首をかしげようとしたのだが、そのとき急におでこ先輩の手に力が入った。

「状況が読めないけど、そんなに目が合うとヤバいことが起こるはずなのであれば唯を見ていればいいだろー！！」

「・・・・は？」

いやいや、読めないのはあなたの脳内ですよ。

と、ツッコミを入れている間におでこ先輩により無抵抗な俺は無理やり平沢姉の方に顔を向けられてしまった。

そして、不覚にも目があってしまった。

「なんだ、やっぱり平気じゃないか」

そうおでこ先輩が言いきった瞬間。

ボンッッ！！！

俺の精神は冥界旅行へ出かけてしまった。

？？？？？

「おーい。大丈夫かー？」

「うおわっ！！」

目が覚めると目の前におでこ先輩がいた。

でも、またまたショートしなかった。

どうやらこの先輩のみ大丈夫らしい。

「いや～、いきなり頭からけむりだして机に突っ伏しちゃうもんだからビックリしたっつーの」

「す、すいません。体質っつーか、どうにも出来ないモンなんで」

「らしいなー。憂ちゃんから聞いたよ」

「そう言えば、憂と純は？」

「もうとっくに帰ったよ。惜しくも二人とも確保できなかったけどなー」

「そうすか」

そう言いながら俺は窓の外を見てみた。

確かに西日が差しこんでるし、きれいな夕焼け見えちゃってんな。

ったく、どんだけ気失ってたんだ・・・・・なっさけねー。

「んじゃあ、俺もそろそろ・・・・」

「「「「ちょっと待ったーーーーーー！！！」」」」

「えぇ！？憂たち帰っちゃったし、俺見ての通りショートしちゃうから部活に入るのなんて無理っすよ！！」

「そんなのは百も承知だぜ！！だから私しか喋って無いんだろ？」

「た、確かに・・・」

「こっちはこっちなりにショートさせないようにしてるんだから、自己紹介と演奏聞くぐらいいいだろ？」

・・・・・あんまりここにとどまる理由として成立していないような。

でも長く居座っちゃったし、それぐらいは聞いて行くのが礼儀か。

よしっ！今度は絶対ショートしねぇぞ！！

「わかりました。俺も流石にこのまま立ち去るのは気が引けるんで」
「よぉーし！！それじゃあ、自己紹介いっとくかぁーーー！！」
「「おーっ！」」
「まずは、我らが軽音部の源！お茶とお菓子の提供者であり、キーボード担当のお嬢様！！琴吹紬！！」
「どうも、琴吹紬です♪」

ぐっ！！
耐えろ、耐えるんだ俺。
大丈夫。俺が見ているのは目じゃない、あの整ったまゆげだ！！

「続いてー！！軽音部の華。ファンクラブまで存在する華麗なるベーシスト！！秋山澪！！」
「ファンクラブの事は言うなーーーー！！っと、秋山澪です。よろしくな」
「よろしくです」

・・・・秋山先輩。
目を逸らしてくれてありがとーーーーっ！！

にしても綺麗な先輩だな。
長い黒髪も、しっかり者そうな顔立ちも、全部のパーツが共鳴し合っているような感じがする。

ファンクラブがあるのも納得だな。

「さて次は、我らが軽音部のギター担当にしてメインヴォーカル！そして憂ちゃんの姉でもある、平沢唯！！」
「どうも、平沢唯です。憂から話しは聞いてるよ～。憂と仲良くし

てくれてありがとね」
「い、いえいえこちらこそ・・・・・」

容赦ねぇぇぇ！！
悪気は無いんだろうが、そこまで真っ直ぐ見られると悪意しか感じねーよ！！

うぅ・・・。
意識が飛びそう・・・。

「ほら、唯それくらいにしとけ。それ以上やったら邑園君また気絶しちゃうだろ」
「はっ！！忘れてた！！結祐くんごめんね。そしてありがとね澪ちゃん」
「それじゃあ、意識が朦朧としてきたところで私の自己紹介いくぜ！！」
「ど、どう・・・ぞ」
「私は、頭脳端麗・容姿明快！軽音部の創設者でもあるーーーーー田井中り～つ～！！」
「あの・・・・」
「ん？何だね邑園君」
「『頭脳端麗・容姿明快』って頭脳明快・容姿端麗の間違いでは？」
「こ、細かい事は気にするな！！それじゃあ、自己紹介も終わったところで演奏いってみるかーーー！！」

田井中先輩のその一声で全員が持ち場につく。

・・・・案外カッコいいな。

「それじゃ、いくぞ！1，2，3，4！！」

?.?.?.?.?

演奏はそこまで凄いわけでは無かった。
音楽知識がほぼ0の俺が聞いてもお世辞にもうまいと言えるもので無かった。

なのに俺は物凄く感動していた。
みるみる音楽に引き込まれていった。
聞いてる間は目があったりしたけど、ショートすることすら忘れてた。

演奏が終わったその瞬間。
俺は惜しみない拍手を送っていた。
その行為は意識的にやったというよりか、反射に近かった気がした。

「拍手してくれてるってことは、それなりに良かったってことか？」
「いいえ！あんまりうまくありませんでした！！」
「「「「え？」」」」

場が凍りついたのがわかった。
でも夢中になっていて、気の利いた言葉が浮かんでこなかった。

だから、俺は今自分が感じたことと、自分の思いを素直に伝えることにした。

「でも・・・・・」
「でも？」
「引き込まれました。何度も何度も平沢先輩や秋山先輩とも目があ

ったけど、ショートすることを忘れていました。それくらい引き込まれました！！」

その言葉を聞いて一気に先輩方の表情が明るくなった。

が、俺の話はまだ終わっていない。

この次の言葉が一番いいずらいけど言いたかった。

「それで、さっきまで入部しないって言い張ってたのに急に心変わりしたみたいで不愉快になっちゃうかもしれないんすけど・・・。俺を、この部に入部させてください！！」

若干、沈黙が続いた。

そのあいだ俺の心拍数はどんどん上がった。

もしかしたら駄目かな？とも思った。

けど、帰ってきた言葉はいたってシンプルだった。

「「「「軽音部へようこそ！！！」」」」

第三話　?部活見学！！??（後書き）

次回は・・・・・

『くっ！やっぱり判断ミスだったのか！?』

『お、俺一人・・・！?』

次回、【新歓ライブ！！】

・・・・・多分一話で収まるはずっ！！

第四話　？新歓ライブ！！ー前編ー？（前書き）

一話で収まりませんでした（；Д；）

近いうちに後編も投稿できる様に頑張ります！！

感想をくれるとうれしいです！！

それでは４話どうぞ（＾Ｏ＾）／

第四話　？新歓ライブ！！ー前編ー？

入学してから８日。
俺、邑園結祐が軽音部に入部した次の日。
未だ多くの新入生が部活を決めている最中の今日は、実は軽音部の命運を懸けた日だったりする。

そう、今日は・・・・

「新歓ライブだぁーーー！！」
「「おぉーー！！」」
「ユウ、澪、声が出てないぞ！ほらっ、二人合わせてせーの！」
「「お、おぉ・・・・！」」
「よし！それじゃあまずは――――――」
「お茶にしましょうか♪」
「「さんせーいっ！！」」

そう言って田井中先輩やひらさ・・・ま、秋山先輩以外はお茶用（？）テーブルに座ってしまった。

新歓ライブ――――――要は新入生歓迎ライブとは俺を含む今年入学した新入生を歓迎するための名前のまんまのライブだ。
そして、新入生の心を軽音部がキャッチするための最初のステージだと俺は思う。

なのに・・・・

「何やってんだ～？ユウ。こっちに来いよ」
「おい律！」

「そうだよゆーくん。クッキーおいしいよ～」
「唯まで！」
「まぁまぁ澪ちゃん。とりあえず紅茶でも飲んだら？」
「あぁ、ありがとうムギ・・・・・・ずずっ」
「「あ、澪（ちゃん）飲んだ」」
「・・・・・ま、まぁ本番前に心を落ち着かせるのも必要だよなっ！！」

唯一の仲間だと思ってた秋山先輩が手なずけられたッ！！

お茶やお菓子は確かに必要なのかもだけど、本番前はさすがに自粛してくださいよ・・・。

「ほら、何やってんだ？早く来いよ、ユウ」
「そうだよゆーくん。私がゆーくんのぶんのクッキーまで食べちゃうよ～？」
「くっ！この部に勢いで入部したのは判断ミスだったか！？まあいいや。それより先輩たち練習しとかなくていいんすか？」
「わかってないな～ゆーくんは」
「そうだぞユウ。私たちはお茶しないと演奏できないんだぞ？」
「威張って言わないでください。っつか、入部した途端に妙なアダ名で呼ばないでくださいよ」
「えぇ～。べつにいいじゃん。ゆーくんで」
「そうだ！結祐よりユウの方が呼びやすいじゃないか？」
「いや、そういう問題じゃ・・・」

俺がそう言いながら呆れた様にため息をついたそのとき。

コンコンッ。

音楽準備室の扉が誰かによって叩かれた。
誰かはわからないが、お茶中の先輩方は全く動きそうにないのでとりあえず俺は扉を開けてやった。
「はいはーい？どなたですかい？」
「あ、生徒会の真鍋和（まなべのどか）ですけど、部長・・・と言うか律いるかしら？」
「田井中先輩お呼びでっせ～」
「ほいほいー」
そういいながら田井中先輩は真鍋先輩と廊下に出て行った。
それにしても驚いた。
扉を開けたら女子とか・・・・ゾッとしたわ。
最近ものすごく目を逸らすスピードが上がってる気がする。
・・・それっていいことなのか？
と思いつつ、振り返ると目に入ったのはクッキーを食べる先輩たちだった。
はぁ～。
こんなんで新歓ライブ平気なのかよ？
そう呆れながら伸びをして、ため息をつきながら下を向いた。
すると、琴吹先輩がいつの間にか俺を見上げていた。
・・・・見上げる？
俺は見下ろす。

つまり、目が合っちゃってる？
そう自覚した瞬間、
「～～～～～ッ？」ボンッ？
と、俺は頭が爆発したようにけむりを上げその場に倒れた。
琴吹先輩はそういうことしないと思ったのに・・・・。
と、俺が何かを考えることで意識をなんとか保ち復帰しようとしていたその時、俺は人の好奇心の怖さを知ることになった。

一方そのころ、私、田井中律は和から今日の新歓ライブの説明を受けていた。

「と、言う訳だから、みんなにも伝えてね」
「へーい」
「伝えることちゃんと覚えてるわよね？」
「大丈夫！！なぜなら私が田井中律だからッ！！！」
「ちょっと心配ね・・・・。まぁでも、さすがに律でも大丈夫よね」
「”さすがに”ってどういう意味だよ・・・・。ま、田井中さんに任せとけって！！」
「それじゃあ、よろしくね」

そう言って持ち場に戻ろうと踵を返した和を私は見送った。

さて・・・・なにを伝えるんだっけ？
忘れちゃったＺＥ☆

って言うのは冗談で、マジでなんだっけな～？
と、ついさっきかわした会話を思い出しながら私は部室のドアを開けた。
すると、目に入ったのは、

白目をむいて倒れているユウと、それを笑顔でつつくムギと唯だった。

「あ、りっちゃん！ゆーくんすごいんだよ！！」
「そうなの！結祐くんどんなにつついてもビクともしないの！！まるで石像みたい！！」
「や、や・・・・・・め・・・・・・。意識が・・・・・・と・・・・・・ぶ・・・・・・」

・・・・・・地獄絵図？
ってか、ユウ『やめて』って言おうとしてんじゃん。
なのに、ムギも唯も・・・・・・

一体私がいない間に何があったんだよ！？

「お、おい澪」
「どうした？律」
「澪はこれを見て何とも思わないのか？」
「んー・・・・・・」

澪はそう唸ったあと、テーブルに乗っているクッキーを1つ頬張りながらいたって冷静に私に言った。

「多分、これが軽音部の日常に加わると思うからいちいち驚いてた

らキリがないかなーって」
「・・・・・ついに澪まで」
♪♪♪♪♪
「ったく、マジでやめてくださいね。目ぇ合わすのも触れ合ったりするのも俺ダメなんすから」
「ごめんね。ついやりたくなっちゃって♪」
「はぁ・・頼みますよホントに。ところで、田井中先輩。さっきなに話してたんですか？」
「聞きたいか～？」
「もったいぶらないでくださいよ。どうせ新歓ライブ関係でしょ？」
「そうだぞ律。私たちなんだかんだで本番前なのにまだ練習してないだろ」
「しょうがないな～。教えてやろう！楽器や機材の搬入だが・・・・私が講堂許可証とか出し忘れたせいで生徒会は手伝えないそうだ！！」
「そんな！？りっちゃんそれじゃあ・・・・」
「あぁ。アンプもドラムも自分たちで運ばなくちゃいけないな。・・・・くっ！一体誰のせいで！？」
「お前のせいだろ律」
「・・・・てへっ☆」
「てへっ☆じゃない！！どうするんだよ？本番まで時間無いぞ。まだ通しの練習もしてないのに・・・・」
「そうね、衣装にも着替えてないしね」
「「「「さわちゃんっ！？」」」」
そう先輩が声をあげて見た先には、誰もいなかったはずなのにい

つのまにか女性が座っていた。

”さわちゃん”と呼ばれていたが、確か音楽教師の山中さわ子先生・・・・だった気がする。

生徒の間でも若くてきれいな先生で通っているらしい。

勇利曰く『あのスタイル！あの笑顔！長い髪！そして眼鏡！！全部が大人の女性って感じを引き立ててる！！』そうだ。

実はそのあと『いや～。生徒と先生の禁断の愛なんてのも・・・・』と、アホみたい（実際アホだが）な事を言っていたので成敗したが・・・、まぁそんな回想は今必要ないだろ。

と、自らの脳裏から忌々しい勇利（アホ）の記憶をもみ消していると、

「あ、あなたが新入部員ね」

と声を掛けられた。

突然だったのでちょっと驚いたが、ショートはしなかった。

女子に囲まれてるって言う最悪の環境のおかげだろうか・・・？

そう考えると思わず苦笑いがこぼれてしまいそうだったので、そのまえに返答をすることにした。

「えっと、邑園結祐です。たしか、山中先生でしたよね？音楽科の」

「あら？自己紹介はいらないみたいね」

「まぁ、一応先生方の顔と名前は覚えてますから。んで、その山中先生が軽音部に何の用すか？」

「ふっふっふ・・・・見て驚けっ！！」

そう言って山中先生が机の上に出したスーツケースの中には、チャイナドレスが入っていた。

チャ、チャイナドレスだとッッ！！とまではいかないが、少し驚いた。

でも、これを見せてどうするんだ？

そう俺が思った瞬間。

「「「カッコいーーーー！！！」」」

田井中&平沢&琴吹先輩が身を乗り出して叫んだ。

・・・俺的には服よりこっちのリアクションの方が驚いたわ。

「さわちゃんこれも作ったんだよな？」

「そうよ～。大変だったんだから」

「ふーん。作ったんすか・・・・・って作ったぁ！？これを！？」

「モチロン！！私はどんな服だって作れるわよ！」

「そうだよ～。ゆーくんが部活見学しに来た時私たちが着てたメイド服もさわちゃん先生の手作りだよ！」

「へ、へぇ・・・・」

恐るべき、山中さわ子！！

メイド服とか、チャイナドレスとか、並の人間じゃ作れねーぞ・・・。

「ところで先生。コイツをどうするんすか？」

「なに言ってるの？着るのよ。唯ちゃんたちが」

「・・・・は？」

これを先輩方が着る・・・？

ちょこっとチャイナドレスの先輩を想像してみた。

まぁ、もともと美人だし似合わなくは無いな。

ただ、ちょっと着せるのは無理じゃないかと俺は思った。

何故なら、秋山先輩が山中先生登場から青ざめて動かないからだ。

なんで青ざめているかは分からないが、先生登場と同時だったのでこのチャイナドレスが関係していることは間違いないだろう。

例えば――――――着るのが恥ずかしいとか。

俺がそう思ったときだった、

「れ、練習しよう！！」

急に秋山先輩が立ち直った。

「ほ、本番まで時間無いし、急いで練習しよう！なっ！！」

「そんなこと言って～。着たくないだけなんじゃないか？澪」

「そ、そんな事はない・・・・ような・・・・・」

「やっぱそうじゃんか～。まぁ、そこまで言うなら澪は着なきゃいいんじゃないか？」

「え・・・？」

「そうだよ澪ちゃん。無理に着なくてもいいんだよ？」

「そうね。澪ちゃんは恥ずかしがり屋さんだしね♪」

「私も、せっかく作ったものを着てもらえないのは残念だけど、澪

ちゃんのためなら涙をのむわ」

そんなみんなの励ましで秋山先輩は徐々に表情を明るくしていき、

「み、みんな・・・・・」

そう呟いたときには感動で涙目になりかけていた。

のだが、

「ま、でも一人だけ制服ってほうが帰って目立つかもな～♪」

「そんなの嫌だぁぁぁぁ～！！」

どん底に突き落とされた。

うんうん。

これが噂の『持ち上げといて突き落とす。持ち上げられた時ほど痛みは強い。』の”ちやほやの法則”か。

そう目の前で起こったことを考察していると、ふと山中先生の腕時計が目に入った。

現在の時刻は１２：２５。

新歓ライブは『新入生オリエンテーション』要は部活紹介の中に組み込まれているから、集合時間は１３：００。

今から通しの練習に・・・・確か３曲とか言ってたから多く見積もって大体２０分くらい。

先輩たちの着替えと身だしなみに多く見積もって１０分。

楽器類、必要な機材を運ぶのに短く見積もって１０分。

合計４０分・・・・。

時間が足りねぇぇッッ！！

その驚愕の事実に気がついた俺は先輩たちを見たが、相変わらずぎゃあぎゃあ騒いでいた。

・・・本来は右も左も分からない新入部員が偉そうなこと言うべきじゃないんだろうが、事態が事態だ。

迷ってられるか！！

「先輩！！」

「「「「ん？」」」」

「ん？じゃないっす！！あと本番まで３５分しか無いんすよ！！」

「大丈夫だよゆーくん。まだ３５分もあるから」

「じゃあ聞きますけど、琴吹先輩、最後の通しの練習するのに何分かかります？」

「２０分くらいじゃないかしら？」

「じゃあ先生。先輩たちの着替えに何分かかりますか？」

「チャイナドレスだからちょっと私も手を加えたいし・・・・１０分くらいじゃないかしら？」

「次、田井中先輩。楽器運ぶのに何分かかりますか？」

「私たちだけで運ぶからな・・・・頑張っても１０分はかかるんじゃないか？」

「それじゃあ、平沢先輩。練習、着替え、運搬、合わせて何分かかりますか？」

「え～と・・・・４０分かな？」

「それじゃあ、秋山先輩。本番まで何分でしたっけ！？」

「３５分・・・・って」

「「「「「間に合わないじゃん！！」」」」」

ここまで来てやっと気付いたんかい・・・・・。
っつか、俺の予想ドンピシャだったな。

ま、とにかく先輩たちはやっと気がついたみたいだし、練習時間でも縮めれば・・・・

「りっちゃんどうしよ！？私一回本番前に通さないと分かんないよお～・・・」
「確かにそうだな。私もちょっと心配だな・・・・」
「なんだかんだで、今週は新入部員勧誘のことしか考えて無かったもんね・・・・」
「じゃあ、やっぱり練習は縮められないよな・・・・」

なっにいいいいいい！？
アンタ達、普段何やってんだ！？

くっ！こうなりゃあ・・・・

「じゃ、じゃあ、制服で出場して着替えの時間を無くせ――――――――」
「それだけは許さないわよぉ～・・・・・・」
「うわ！さわちゃん”失恋モード”だ！！」
「し、失恋モード？」
「そうだよゆーくん。失恋モードのさわちゃんはだれにも止められないんだよ」
「着替えの時間を・・・私の努力をどうするってぇ～・・・・」

そう言ってまるで『バ○オ・ハ○ード』のゾンビのような動きで俺に近づいてくる山中先生。
非常に動きは気持ち悪いが、女性は女性。

あんま近づかれると・・・・マズイ！！

「わ、分かりましたよ！！でもどうするんすか！？たしか軽音部はトップバッターっすよ！遅れたら全体進行に支障が出ちゃいますって！！」

「確かに結祐がいうことも正しいな」

「でも澪、練習も着替えもどうにも出来ないんだぞ？」

田井中先輩のその言葉でこの場にいる全員が黙り込んだ。

ぶっちゃけ最悪の状況だ。

この間にも刻一刻と時間は迫ってるし、一体どうすりゃあ・・・・・・

そう思った時だった。

「そうだ！！」

「なんか浮かんだのか唯！？」

「うん！！」

「なになに？教えて唯ちゃん！？」

「えっとね、一つ一つやって間に合わないなら同時にやればいいんだよ！」

「同時に・・・・？」

「そう！私たちが練習している間にアンプを、着替えている間に楽器を運んじゃえばいいんだよ！！」

「でも平沢先輩。生徒会は手伝ってくれないんすよ？」

「そうだぞ唯。たしかにそれなら可能だけど、誰がやるんだ？」

「そうね・・・。たしかに私たちは動けないから、自由に動けるのはさわちゃんぐらいよね・・・・」

「私！？無理よ無理無理！！そもそも着替えの時は私がいない――

――――」

「違うよみんな。私たち軽音部にはもう一人部員がいるじゃん！！」

「「「「あ・・・・・」」」」

その平沢先輩の言葉で、傍観者だったはずの俺は急に話しの中心に放り出された。

ってか、この流れはまさか・・・・・

「お、俺一人で・・・・！？」

いやいやいや、絶対無理でしょ！！

一人でドラムもアンプも全部運べるわけ無いじゃん！！

そんな悲痛な思いを込め、俺は唯一目を合わせられる田井中先輩の目を見つめた。

すると田井中先輩はとたんに優しく微笑んで俺に言い放った。

「ユウ・・・・・頼んだぞ！！」

こうして俺の高校生活初の肉体的死闘が幕を開けた。

ライブまで残り３０分！！

第四話　？新歓ライブ！！ー前編ー？（後書き）

次回は・・・・・

『あなたも大変ね・・・・・』

『目のやり場がねぇぇぇ！！』

『よっしゃー！！いくかー！！』

『あの、入部希望・・・・なんですけど・・・・』

次回【新歓ライブー後編ー】

第四話　？新歓ライブ！！ー後編ー？（前書き）

新歓ライブ後編です。

曲名や歌詞は、著作権保護法に触れるため虫食いや一部のみとなっています。

ご了承ください。

それでは、どうぞ。

第四話　？新歓ライブ！！ー後編ー？

「ぜぇ・・・ぜぇ・・・」

現在、俺、邑園結祐は自分との死闘を繰り広げていた。
しかも、二種類の。

一つは肉体的死闘。
要はアンプ運びなわけだが、山中先生から台車を貸してもらっても重たいものは重たい。
しかも階段は台車ごと担がなくてはならないのだ。

アンプだけであともう一往復しなきゃなんねぇのかよ・・・・。

次にもう一つの死闘。
それは――――――――

「目のやり場がねぇぇぇぇっっ！！」

精神的死闘。

っつても、普通ならこの状況でそんな戦いは起こらない。
はずだけど・・・・なにしろ俺は女子と目があっただけでショートするようなかわいそうなスキル（？）を持っているため、この女子で溢れかえった廊下を通るのは相当きついのだ。

しかも、俺は今台車でアンプを運搬中。
どの方向からも好機の目が絶えねぇぇぇっ！！

「くっ！！耐えるんだ邑園結祐！！お前はできる男だッッ！！」

そう叫びながら俺はひたすら講堂へと走った。

♪♪♪♪♪

こんにちわ。
平沢憂です。

今日は私が見る初めてのお姉ちゃんのライブです！！

「純ちゃん。一緒にライブ見に行かない？」
「ごめんね。憂。私ジャズ研に入部したから、そっちの手伝いがあって・・・」
「あ、そうなんだ・・」
「ごめんね憂」
「ううん。気にしないで！」
「ホントにごめんね。それじゃあ、私行くね」

そう言って純ちゃんが教室を出ようとした時でした。

『耐えろ俺ぇぇぇーーーーーッッ！！』

と叫びながら凄い速度で何かが通り過ぎました。

よく姿は見えなかったけどあれは・・・

「ねぇ、憂」
「なぁに？純ちゃん」

「今のって結祐だよね？」
「うん。そうだと思うよ。たしか結祐くん、軽音部に入部したってお姉ちゃんが言ってたから」
「へぇ・・・・あの結祐がね・・・・・・。まぁ、いっか。それじゃあ、今度こそ私行くね！」
「うん！ジャズ研頑張ってね！」

そう言いながら手を振って私は純ちゃんを見送りました。

さてと、じゃあ一人で見に行こうかな・・・・と席を立った時でした。
たまたま、鞄を持ち上げてどこかへ行こうとする女の子が見えました。

確か、中野梓ちゃんだったかな・・・・？

せっかくなので私は誘ってみることにしました。

「あのっ！！」

♪♪♪♪♪

「あなたも大変ね・・・・」

それが汗水たらしてアンプを運んできた俺を見た真鍋先輩の率直な感想だった。

「軽音部に入部して大変じゃない？唯から聞いたわよ。すぐに気絶しちゃう面白い後輩が入部したって」
「まぁ、気絶しちゃうのに関しては何部だろうがこの学校に入った

時点でアウトだし、それに、俺が決めた道だから。途中であきらめんのはカッコ悪すぎですしね」
「偉いのね」
「真鍋先輩には敵いませんよ。っつか、平沢先輩から聞いたってことは俺がどんな条件でショートするかもご存知で？」
「えぇ。目を合わせたりすると駄目なんでしょう？だから今も下向いてるのよね？」
「ご理解とご協力感謝します！！それじゃあ、俺続きがあるんで」
「えぇ。頑張ってね」

そう言ってくれた真鍋先輩に軽く手を振って俺は部室へ向かった。

♪♪♪♪♪

そして現在１２：５８。
結局俺はあの後、二台目のアンプ、ドラム、キーボード&ギター&ベースを運ぶために三往復もした。

一応俺は中学時代、陸上部だったのでまぁ体力はあると思ってたのだが・・・・

「やっぱり半年以上空くと体力もなくなるわな・・・・・」
「お疲れ様。後は唯たちを待つだけね」
「そ、そうっすね・・・・・・」
「大分疲れてるみたいね。とりあえず、水でも飲んだら？」

そう言って真鍋先輩は俺にペットボトルを差し出した。

真鍋先輩、メッチャいい人だ！！

「ありがとうございます！！あ、でもこれまさか・・・・・・」
「あぁ、大丈夫よ」
真鍋先輩がそう言うので俺は有難く水を一口いただいた。
その瞬間、
「まだ私しか口付けて無いから」
・・・・・ボンッ！！
だから、それを懸念してたのに・・・・・。
大丈夫って言ったじゃん！この裏切り者ーーーー！！
そう言いたかったが、意識が朦朧としてうまくしゃべれない。
ただ、真鍋先輩は俺がショートしたことに気がつかず、喋り続けていた。
「邑園君が気にしてたのって関節キスのことでしょ？私そういうの気にしないから大丈夫よ。だから、遠慮せずに飲んでね」
そう言って真鍋先輩はやっと俺の方を見た。
白い蒸気を存分に上げて気を失いかけている俺を。
「・・・・・あれ？」
おそらくとても見慣れた光景とは言えないからだろう。
いつも落ち着いている真鍋先輩がそう腑抜た声を出した時、ちょうど軽音部が到着した。

そして困惑している真鍋先輩に向かって秋山先輩が一言。

「和・・・・・今度から気をつけような」

♪♪♪♪♪

そしてついに迎えた１３：００。

俺もなんとか1分で意識を回復させ、やっと軽音部は全員集合した。

チャイナドレスで。

「よぉーし！！全員準備は良いな！？」

「だ、大丈夫！」

「大丈夫よ♪」

「私もギー太も絶好調！！」

「ユウはどうなんだ？」

「まぁ、絶不調ではないっす」

「それでよし！！」

そう言って田井中先輩は俺にニッと笑うと、ドラムスティックを頭の上にあげ叫んだ。

「よっしゃー！！行くかぁーー！！」

♪♪♪♪♪

１３：００。

お姉ちゃんのライブを見るために私は講堂に来ていました。

さっき誘った中野梓ちゃんと一緒に。

「ごめんね。付き合わせちゃって」

「ううん。大丈夫」

そう言った梓ちゃんは何だかつまんなそうでした。

何か、誘わないほうがよかったかな？

そう私が思った時。

ステージの幕が上がり始めました。

♪♪♪♪♪

俺は先輩たちの演奏を舞台袖で聞いていた。

最初の曲は『ふ〇ふ〇時間』。

名前も歌詞もメルヘンチックな曲で、俺が始めて聞いた曲でもある。

♪～♪～♪

と、平沢先輩の声が会場中に鳴り響く。

やっぱりあんまりうまくないな。

俺は苦笑いしていた。

でも、

『～～～～どうにーかーなーるよねっ！！』

やっぱり引き込まれるな。

そんなことを再確認している間に、一曲目が終わってしまった。

確か、一曲目の間に部活紹介入れるって言ってたな。

そう考えている間に、平沢先輩のＭＣが始まる。

・・・・あの先輩、若干抜けてるけど大丈夫か？

『え～。新入生のみなさ「キィーーーーンッ」あわわ・・・』

大丈夫じゃ無かった！！

頼みますよ、平沢先輩！！

これで部員獲得できないと、１年生俺一人になっちゃうからっ！！

『えっと、改めまして。新入生のみなさん。ご入学おめでとうございます！そして、今日は私たちの曲を聞いてくれてありがとうございます』

そこまで言ったところで俺はちょっと心配になって、舞台袖から出て観客を見てみた。

怪訝な目で見てる人はいないっぽいから、まぁ大丈夫か。

っつか、むしろチャイナドレス効果で好機の目で見てる人が多いな。

『私たち軽音部は現在５人で活動しています。せっかくなので部員も紹介しておこうと思います』

案外平沢先輩はＭＣうまいんだな。
聞いてて安心する。
そう感心しながら、俺は再び舞台袖に戻る。
『まずは、ベースの秋山澪ちゃんです。澪ちゃん一言どうぞ』
『え、えっと。秋山・・・・澪・・・・です』
”かわいーーっ！！”という歓声がまばらに起こった。
だてにファンクラブがあるわけじゃなってことか。
『次に、キーボードの琴吹紬ちゃんです』
♪♪♪～『琴吹紬です♪今やったようにキーボードをやってます♪』
『ありがとムギちゃん。それじゃあ次は、我らが軽音部の部長にしてドラムの――――――』
『田井中律だ！！』ダダダンッ！！
田井中先輩が叩いたドラムに合わせて、”カッコいー”という歓声が巻き起こった。
田井中先輩ナイスッ！！
さて、それじゃあ後は平沢先輩が紹介して二曲目、三曲目突入か。
なんとか行けそうだな。
俺が安堵の息をついた時だった。
『ありがとね～りっちゃん。えっと次は、みんなと同じ1年生です』
という、謎のＭＣが始まったのは。

明らかにおかしいよね？
俺演奏すらしてないのに、っつか入部したの昨日なのに、なによりこれって1年生のためのライブなのに、何故ここで俺を出す！？

そんな俺の気も知らず平沢先輩はＭＣを続ける。

『今はまだ何の楽器もやって無いけど、今日ここに楽器を運んでくれたのはその一年生です』

待て待て待て待て！！

この流れは舞台に出なきゃいけないパターンじゃねぇか！
無理だからね！俺がこのタイミングで出るのもおかしいし、まず第一俺は舞台なんかに出たら突き刺さるような視線に負けてショートだっつーの！！

そう嘆きながら頭を抱えた瞬間。
隣の真鍋先輩が、俺に向かってこう言った。

「観念したほうがいいわね」
「仰るとおりです・・・・・うぅ・・・・・」

『それでは出てきてもらいましょう！邑園結祐くんです！！』

・・・覚悟は決まった。
俺、いざ出陣！！

と、意気込んで俺は舞台に上がった。

『それじゃあ、ゆーくん一言どうぞ』
「・・・・・・」
『あれ？ゆーくん？』
「・・・・・」
『・・・まさか！唯とりあえず続けろ！ユウはもう駄目だ！！』
『え？わ、分かった！え～と、ゆーくんはあの・・・その・・・・・』

ざわつく新入生を必死に平沢先輩がなだめるのと同時に、俺の残された意識は消え去った。

♪♪♪♪♪

「ほんっとにすいません！！」
「いや、そんなに謝んなよ・・・」
「でも、俺がショートしたせいでライブを台無しにしちまって・・・・」
「いや、あれは私たちの不注意もあるから、結祐が気にすること無いよ」
「いや・・・・ほんとにすいません」

もう謝るしかなかった。

何故なら、俺がショートしたせいで雰囲気は台無し。
加えて、時間が押してしまって二曲しか演奏できなかったんだから。

謝っても、謝りきれねぇよ・・・・。
これで新入部員来なかったらどうしよ・・・・。

「とりあえずお茶にしましょうか♪」
「そうだな！クヨクヨしててもしょうがないしな！！」
そう先輩たちは俺を元気づけようとしてくれているが、入部二日目でこの失態。
簡単には立ち直れねぇよ・・・。
とはいえ、折角の好意を無視るわけにもいかないのでとりあえず席に着く。
「・・・やっぱ入部希望者来ないっすね。はぁ・・・・」
「まぁ、新歓ライブがあんなことになっちゃったしな」
「律！！」
「う、嘘だよ・・・」
「いやいや、田井中先輩の言う通――――――」
コンコンッ。
それはドアをたたいた小さな音だったが、一瞬で俺たちの口を黙らせた。
入部希望者かも。
そんな期待が俺たちの中で渦巻く。
が、いつまでもドキドキしてほっとくわけにもいかないので、田井中先輩がドアに向かって言った。
「どうぞー」
すると、ドアがゆっくりと開いて、

「あの、入部希望なんですけど・・・・」
「い、今なんと？」
「入部希望です」

その言葉を聞き先輩たちの表情が一気に明るくなる。
もちろん俺も、気絶後特有の酔った時のようなグラグラする視界でドアを見て、表情を明るくした。

う～ん、でもあのシルエットどっかでみたような？

そう俺がぐらつく視界で出入り口を見続けていると、田井中先輩がたちあがった。

そして、

「確保ーーーーっ！！」
「きゃあああああ！！」

と、叫びをあげる入部希望者に無理やり抱きついた。

おいおい、んなことしたら逃げちゃうんじゃ・・・・

そう俺が懸念を抱いたその瞬間。
俺のぐらつく視界がきっちり新入部員の顔を捉えた。

特にこれといって琴吹先輩のような特徴は無かったが、長い紺のツインテールが特徴的な女子・・・・・・ってあいつは！！

「梓ぁ！？」

その俺の叫びに反応して新入部員が俺の方を向く。

目がばっちり合ったけど、ショートしない。

やっぱり梓だ。

と、確信は一応得たが念のため確認しておこう。

「お前、中野梓だよな？お前、なんでこの学校にいるんだよ？」

「それはこっちの台詞！！結祐こそなんでこの学校にいるの！？ここ元女子高だよ！？」

「そ、それは色々あったんだけど、とにかく良かった！！入部してくれたことも、梓がこの学校にいてくれたことも！！」

「・・・・えっと、お二人さん。盛り上がってるとこ悪いんだけど。知り合いなの？」

田井中先輩のその質問に対して、俺と梓は目を見合わせた。

別に隠すことじゃねぇよな？

そうお互いに確認すると、ありのままを言った。

「「俺（私）たち、幼馴染です」」

第四話　？新歓ライブ！！ー後編ー？（後書き）

次回は・・・・

『放課後が楽しみでした！！』

『もしかして秘密とか知ってるのか？』

『大丈夫だって。俺も付いてる！』

『はわわわわーーーーっっ！！』

次回、【新入部員？】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7609z/

K-ON <Backroom Story>

2011年12月31日01時48分発行